

# 随想



## 私の歌枕

伊勢屋宇一郎

雨が二、三日も降りつゞいて、霽(は)れた一朝久しぶりにジョギングを思い立った。それは起きぬけの頭を醒ますべく、時々歩く私の朝の行事である、居住している宮の境内を裏にぬけ熊本城の十八間櫓の下を通ると、

櫓に巣くう鳩達のふくみ声にふと見上げた反りかえる高石垣は未だ晨(あさ)のひかりも返さず、どっしりとした石組の親しさは、今更ながら、良い環境の処に住んだなと思わず、心の本音がした。不開門下の芝生は、こゝを通る人々に踏みならされて、芝の青さが剣がれ一筋の赤土の細径がくねって続いている。昨日までの雨の湿りに、足許を危惧しながら歩むぬめりである。青い芝生に踏みこめば、布靴をとおして気持悪く草のしめりが滲む。

櫓に巣くう鳩達のふくみ声にふと見上げた反りかえる高石垣は未だ晨(あさ)のひかりも返さず、どっしりとした石組の親しさは、今更ながら、良い環境の処に住んだなと思わず、心の本音がした。不開門下の芝生は、こゝを通る人々に踏みならされて、芝の青さが剣がれ一筋の赤土の細径がくねって続いている。昨日までの雨の湿りに、足許を危惧しながら歩むぬめりである。青い芝生に踏みこめば、布靴をとおして気持悪く草のしめりが滲む。

今、熊本市の電車沿線の、歩道の花壇は殆どマリーゴールドの、まっ黄色の花ざかり。

## 葉牡丹の花

日隈 歌南

炎天下のさなかをキラキラと輝いているのも良いし、秋冷えの中で「あら、まだ咲き続けている」と見ても、そのまゝ新鮮に黄色さが似合うのだから不思議です。

紅黄草ともよぶ、紅の入った花が咲き交っているところよりは、黄色だけのところが芽えてて私は好きです。

野原や田圃の畔で摘める野草が好きだった子供の頃から、孔雀草とか、まんじゅ菊とか言ってた此の花が、どうしても好きになれず今以て、いけばなの材料にしたいとは思いません。

近頃ミニ作りの可愛い鉢咲きが、よく花屋の店先に出ています、私の集めている三百余种の花の仲間にも、これはありません。

先日からの藤崎神宮の随兵行列が通る

(歌人)

沿道の、マリーゴールドさん達、さぞ迷惑だったでしょうと思います。踏み倒されたり、踏みにじられたりで傷みが目に立ちます。そのあとにはそろそろ植え替えでしょうが、順からだ葉牡丹でしようか。

これも根づいたら、めきめき葉を拡げ出し「おお寒むさむ」と言う頃、それこそ牡丹色に、真白に、寒風の中もりもり芽え芽えと、冷たさを跳ね返す様子をさせるのは、固い雰囲気ながら楽しめませす。

その固さが伸びて、少しふくよかに見える頃、そのまゝほおって置くと、いわゆる鬘が立ち、茎の頂天から五十種も、六十種も、もつとも伸びて、うす黄色の十字花を穂に綴り風が吹けば何とも嬉しい波を打たせませす。

手入れを届かせて、霜に負けてちぢんだ葉や、泥をつけたまゝ枯れた地面近くの葉を除き、あの沢山の茎立ちを見せた明るい脚元にしたら、晩春の良い彩りになるかと思えますの。

「葉牡丹に花が咲くの」とびっくりする人もあるくらいだから、早く抜きとって仕舞うのが残念な気が致しますが、次をたのしませる三色菫が。それ迄待つてくれませんもの。

先日、藤崎宮参拝のあと、鶴田公園を久しぶりで歩いて帰りました。手入れが良く届いていて、赤いひがん花がいく百

となく、いいえいく千かしら、行儀よく並んで、川沿いに長く続いて咲いていました。木樨も咲いていました。海紅豆の花のくれない濃い方が咲いていました。

海紅豆で思い出して、つい、くすりとしたのは、或る会合乍ら町角で暫く、そこいらに居なければならなかった時、屏からのり出して赤い花が咲いているのを見て或る人が私に

「あれは何の花ですか」

「海紅豆でしょう」

「えっ、カイコウズてですか、はじめてきますな」

と少し歩き廻ってたその人、戻って来て

「あれはデイゴだそですよ」

わたくし、ダァッ。(華道家)

## 行長公銅像除幕

久野 啓介

丘の上は、光があふれていた。ブルで整地した本丸跡の東の隅に、白布をかぶった銅像は、予想外の大きさに立っていた。台座に大きく彫り込まれた「小西行長公」の文字が、かなり離れたところからも見えた。銅像の前に張られた幾張かのテントの

中がほぼ満員になって、除幕式が始まった。元ミス・ワールドの…と司会者が紹介した大柄な着飾った娘さんが紐を引くと、白布がはらりと解けて、胸に十字架をかけ、刀の柄に両手を置いた「行長公」の立像が、抜けるような青空を背景にして現れた。

関ヶ原の戦に敗れた行長は、三百八十年前のきょう、慶長五年十月一日、京六条河原で首をはねられたという。深い冥界の闇の中から、突如、あふれる光の中に呼び出された「行長公」の表情は、いささか戸惑っている風に見えた。

セイシヨコさんでなければ夜も日も明けぬお国柄、その加藤清正によって、非道者「仏敵」と指弾され、久しく歴史の闇に葬り去られていた行長である。元城下の宇土でようやくにして再評価の機運が高まったこの銅像除幕、それはまさに、追放された王の三百八十年ぶりの復活の瞬間であった。

遠路はるばる訪れた、行長の生地堺市の市長と議長が、銅像の横に堺市木の柳を記念植樹し、東京都神津島村の副議長が同村の「おたあジュリアの墓」から持参した土を納めた。ジュリアは、文禄、慶長の役の際、行長が朝鮮から連れ帰って養育したと伝えられる朝鮮貴族の孤児である。行長の死後、江戸大奥に召されたが、キリシタン弾圧で伊豆に遠島となり、神津島で果てたという。宝塔様と村

人が呼んできた墓前で、十一年前から記念祭が行われるようになり、ことし三月十八日には、世界各国からクリスチャン巡礼団六百人が島を訪れたという。

神津島からの宇土訪問団に同行した東京七島新聞記者田中英一氏は、十数年前から聖女ジュリアの事跡調査に取り組み、数年前韓国まで取材の足をのびたという。その田中氏の話聞いてショックを受けたことがあった。韓国では行長の評判は清正以上に悪かったというのである。わが国における行長再評価のポイントの一つは、文禄・慶長の役で早期停戦、講和に腐心した「平和主義者行長」ということになるようだが、相手側韓国の民衆は、あくまで侵略軍の一番手として祖国を真っ先に土足で踏みじった暴虐の武将として、行長を記憶しているのである。行長の悲運を象徴するような話だ。

「日本でも韓国でも行長は歪めて伝えられている部分が多に多いと思います。しかし韓国女流文学の第一人者韓女史が、行長のほんとうの姿を調べて書きます、と約束してくれました。」と田中氏は語っていた。韓国でもそうした動きがあることはありがたいことだが、それにしても、銅像は建つても、「行長公」のほんとうの復権までには、まだまだ遠い道のりがありそうである。

(熊日文化放送部長)